

長興寺

について(二)

No.365
平成30年7月

如意輪観音は、六観音（聖観音、千手観音、馬頭観音、十一面観音、准胝観音）のうちの一つで、大概六臂（六本の腕）で構成され、長興寺のものもそれと同じである。古文書によると、丈は三尺（約九十七センチ）とあったので実測したらその通りであった。

像容は、像の背後に光背を付け、蓮座に座している。右手の第一手は頬に手を当てる思惟手と呼ばれるもので、衆生をどのように救済しようかと考えている姿である。右手第二手は胸中央に如意宝珠を持つている。それは衆生の諸願望を叶えさせてくれるという宝珠である。右手第三手は六道の畜生道に落ちた者を救う念珠を持つている。左手の第一手は台座に向けられ、左手第二手は未開花の蓮華を持つ。蓮華は清らかな心や悟り、

真理などの象徴を表す。左手第三手は煩惱や悪を打ち砕く仏の教えを表す法輪（輪宝とも言う）を持つている。

右足を立て膝にし、両足を合わせた輪王坐としてゐる。つまり、如意輪観音は法輪の法力や如意宝珠で我々衆生の苦しみを救い、願いを成就させてくれる仏と言える。



次に、長興寺の山門について述べてみたい。

山門は江戸時代中期には表門として、冠木門であった。冠木門とは二本の柱の上に横木を貫通した屋根のない門を言う。現在の門は、四本角柱で瓦葺きの屋根を支えている四脚門である。軒の構造は二軒で、垂木は上下二段構えの作りとなっている。

木鼻には獅子頭が四頭配され、桁上には水禽をあしらった蛙股が備えられている。

この山門についての木札や資料などは残されていない。しかし、ヒントになったのは、六名の奉納者名が彫刻に刻銘されていたことであった。総代や組頭と言った皆地元の人達で、その中で早く亡くなった人は天保四年だと分かった。

恐らく、この山門は、文政後期から天保初期頃に建てられたものと思われる。

彫刻には彫物師の名前が無かったが、作風から増田甚右衛門政近と確定した。山門は甚右衛門がまだ若い三十歳前後の作品と考えられる。

幼名は甚蔵。生まれは江戸深川。四歳にして現いすみ市大原の増田家の養子となる。地元の社寺仏閣の仕事が多く、向拝廻り、山車、神輿などを手掛けている。明治十四年（一八八二）十一月十七日に逝去。享年八十二であった。

片岡 栄

片岡 栄

文芸コーナー

待ち詫びて

山本 明美

闇の中
煌煌と光る箱を
忙しく引いて
一番電車が行った
明けそうにない
黒い空の下
二番電車が行った
飲まないコーヒを
何度も入れてはその度
テーブルにカップを置く
コッソリという
乾いた音に驚く
三番電車も行った
陽が昇り風が
竹林をゆつくり揺すり始めた
その時
電話が鳴った
激しくとても大きな音で
走り寄って
受話器を取ると
「ママ、おはよう」と娘の声
昨日手術を受けた
娘の
穏やかに澄んだ声
張り詰めていたものが
音を立てて剥がれて行った

◎選評 斎藤正敏

娘さんの手術結果を待つお母さん。眠れない夜の緊張した心理が伝わります。明け方、受話器から伝わる娘さんの穏やかに澄んだ声。張り詰めていたものが、安堵に変わる瞬間です。

- 偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。
- 投稿は楷書でお願いします。作品・氏名にふりがなをふってください。

※詩の原稿送付先（直接選者）へ 〒297-0032 茂原市東茂原7番地 斎藤正敏宛。
「広報もばらの詩」と朱書きしてください。原稿は30行以内でお願いします。

